

## 第4章 文化・伝統

### 1 祭り

#### 大高の祭り

大高の祭りは、氷上姉子神社の例祭で、「おひかみさんの祭り」として親しまれています。古い記録によると寛文(1661~73)のころすでに祭りが行われており、元宮に神輿渡御があり、馬の塔、傘鉾車、猩々があったと伝えられます。

『尾陽村々祭礼集』には宝暦年中(1751~64)「八月朔日 馬の塔七疋 警固九十二人 同一疋 警固八人 込高新田より出郷内より神前へ引き渡す」と書か



氷上姉子神社に参集した山車

れています。記載によれば警固の人数だけでも100人を超え、馬の塔が中心の祭りだったようです。高力猿猴庵の『行事絵抄』には現在のような山車(松車・傘鉾車)が境内に繰り込む様子が描かれています。



八幡社に並ぶ山車 昭和56年

明治になって3日間、場ならし、試楽、本楽として行うことになりました。初日は山車をそれぞれの町内を曳きまわす町廻り。2日目は朝早く各町内廻りをして辻の秋葉社に山車が集結し、江明の御幣、新町の猩々、そして各町内の山車の順に津島社へ向かいました。午後は川向の山車を先頭に、山神社から長寿寺をへて八幡社まで曳き、夜までにぎやかに提灯を灯して秋葉社まで戻り解散。

山車は各町に帰り町廻りをして終了しました。3日目は午前、中町廻りをして秋葉社前に集合。新町の山車を先頭に、氷上姉子神社の一の鳥居より境内に入り、神楽を奉納して元宮まで山車を進め、祠前でひとまわりしたあと帰路につきました。途中、新町の萬乗

醸造から本町の間には山車を止め、提灯を灯しました。

昭和34（1959）年に伊勢湾台風で大きな被害を受け祭りは1日となりました。新町、本町、高見、江明、田中、川向、中の郷などの山車（松車・傘鉾車）が祭庫から引き出され、朝早くから町内を笛や太鼓のお囃子で廻り八幡社（町屋川）に参集し、大高川を渡り辻（秋葉社）で休憩。梵天を先頭にええ猩々、花で美しく飾った山車の隊列は、山車を回しながら氷上姉子神社へと向かい込高が合流し、露店の並ぶにぎやかな境内に繰り込みます。神社では本殿前に山車が並ぶと祭事が行われます。

## 有松の祭り

有松には3輦の山車があります。いずれも名古屋市指定有形民俗文化財で、精巧な「からくり人形」を乗せた豪華な山車で、10月の第1日曜日に行われる天満社秋の祭礼では、からくりを披露しながら東海道を曳き回され、美しく幻想的な姿を競い合います。最近では6月に開かれる「絞まつり」にも展示されています。

有松山車会館には、いつも3輦のうち1輦が展示されており、からくり人形を

間近にみるすることができます。3輦の山車のうち2輦は、人形が文字を書きます。布袋車と唐子車に文字書き人形が乗っています。東町の「布袋車」は江戸時代に名古屋城下の大通



山車の横で天狗と戯れる子どもら



絞まつりでにぎわう東海道

りを曳かれた山車で、下玉屋町(中区)が建造した若宮祭りの祭車で、水引幕・大幕ともに豪華な刺繍で彩られています。中町の「唐子車」は天保（1830～44）のころに、知多の豪商が建造し、明治8（1875）年に有松が買い受けたものです。唐木づくりに青貝や珊瑚で細工に工夫を凝らした造りとなっています。西町の「神功皇后車」は明治6（1873）年に、有松が建造した



もので、水引幕は四季の花が刺繍され、からくり人形は神功皇后と武内宿祢と神官で、神功皇后が鮎を釣り上げるようすを演じます。

西町山車庫から引き出された山車は、ゆっくりと東海道を進み、中町の山車、東町の山車と合流し、からくりを披露しながら松の根橋まで進みます。折り返しの有松・鳴海絞会館駐車場では3輦の山車が並んでからくりを披露します。

夜祭は提灯を掲げた山車3輦が待つ祇園寺前まで、町の東から東海道を提灯に小太鼓、鼓、笛で囃子ながら隊列を組んで向かう「囃込み」があり、隊列は山車に着くと、提灯で飾られた山車がゆっくりと動き出し、華麗な姿を見せながら東海道を練ります。

6月には有松商工会や有松絞商工協同組合を中心に行われる「絞りまつり」（6月の第1土・日曜日）が開かれ、ふだんは閉じられている東海道の街並みの格子戸が一斉に開けられ、絞りの販売や実演、絞り染めの体験、山車の展示ほか、町並ツアー、パレードなどさまざまなイベントで町がにぎわいます。

## 桶狭間の祭り

桶狭間には「桶狭間神明社の祭礼」と「桶狭間古戦場まつり」があります。神明社の祭りは、宝暦5（1755）年の『尾陽村々祭礼集』に、知多郡桶狭間村「神明宮の祭、馬の塔式疋、郷内より神明迄引渡、祭日八月十六日、右社同村長福寺扣」と書かれています。馬の塔や傘鉾、音頭台の出るにぎやかな祭りが寛文10（1670）年ころから練り広げられていました。



神明社に練り込んだ笠鉾と猩々

祭りは8月15日と定められ、桶狭間だけでなく有松の祭りでもありました。有松に天満社が創立されてからは、別々に祭りが行われるようになりました。

祭礼は10月15日となり、さらに最近では、それに近い日曜日に行われるようになりました。祭礼は、南町、中町、北町、西町の4町内から、それぞれ梵天、傘鉾、音頭台、神輿の行列がにぎやかに出発します。神明社の入り口に集合し、その年の当番の町内から順に、お囃子と共に神明社に打ち込みをして本殿で式典。安全などを祈願します。境内では猩々も登場、神楽や太鼓の奉納があります。また、厄年の男子と還暦を迎えた年男達が、無事を祈願して奉納した餅を、櫓から投げる「奉納餅投げ」があります。大勢の人が競い合って拾う楽しみもお祭り行事のひとつです。以前は奉納された神馬が境内を走りにぎやかでし

たが、近年は中止されています。傘鉾は尾張藩主に見せるため大高、鳴海の傘鉾とともに熱田まで出かけたとされます。



万灯会

桶狭間古戦場まつりは、今川義元や桶狭間の戦いで亡くなった3,500人の将兵を弔い偲ぶもので、さまざまなイベントのほか、古戦場公園、七ツ塚、戦評の松で供養も行われます。平成15（2003）年からは、大池の周りに約3,500本のロウソクを灯す万灯会も開かれています。

## 鳴海の祭り

鳴海祭りの起源は定かではありません。しかし、朱鳥元(686)年の創建とされる成海神社。室町時代には鎮座していたとされる鳴海八幡宮の祭礼が中心ですから、古くから行われていたと考えられます。

鳴海のもっとも古い記録である『蓬東大記』には、馬の塔、傘鉾、踊りのほか、山車や釣り屋形などが記載されています。江戸時代のはじめまでは、表方、裏方という区別はなくひとつのお祭りを楽しんでいたようです。元禄のころ表方(鳴海八幡宮)、裏方(成海神社)がそれぞれお祭りをするようになったとされます。



提灯も華麗に本町に並ぶ山車

表方では各町内が知恵をしばった出し物を披露していましたが、やがて

傘鉾祭りとなり、笛や太鼓のお囃子がにぎやかに加わって囃子屋台(車)という形ができあがり、裏方では最初から山車祭りという形が整えられていきました。享保のころには、半田方面から山車を購入しお祭りに曳き始めたといわれています。



成海神社例大祭（裏方祭）は、丹下・北浦・城之下（きのもと）・花井の4輦の山車が町中を練り歩いて成海神社の境内に勢揃い。1輦ずつ転回させる神上げ神事が行われます。夜になると提灯を灯した山車は庚申坂へ向かいます。集結した山車は再び町内を練り歩き、それぞれの山車倉に帰ります。山車はすべて古い半田型で、豪華な彫刻と幕が目を引きま

す。

鳴海八幡宮例大祭（表方祭）は、東海道を、傘鉾、獅子、神輿、猩々と共に、作町・根古屋・本町・相原・中島の5輦の山車が練り出します。これらのうち、からくり人形を乗せた相原の名古屋型山車（名古屋市指定有形民俗文化財）を除く4輦はこの地方で発展したもので、祭り囃子を主とした山車です。東海道を練り歩いた山車は、作町の交差点に集まり、東の宿場の入口である平部の常夜灯へ向けてゆっくり進んでいきます。また、夜になると、各山車が提灯を灯し曳かれます。ゆらゆらと揺れる提灯の灯はとても幻想的で、昼とは違った趣があります。楯取り連の衣装はとても粋で、腰に赤・黄・緑・豆絞りなど色とりどりの手拭をきれいにたたんで巻きつけており目に鮮やかです。



名古屋市指定有形民俗文化財 相原町の山車

近年の夜祭では本町に表裏9輦の山車が集まり、華麗な姿を見せていますが、平成25（2013）年の祭りでは、緑区制50周年を祝い、昼に平部に9輦が集結し、夜は本町に再び参集して、訪れた人たちを魅了しました。

もともと山車祭りとして整えられていたのは裏方だけで、表方では各町内による出し物や傘鉾祭りが行われていたところに、笛や太鼓の囃子が加わってだんだん囃子屋台（車）の形になっていき、今のように山車が引きまわされるようになったとされます。

また、秋には鳴海商工会を中心に鳴海宿場まつりが開催され、出店や山車の展示、猩々の人形の登場や住民の演奏や踊りの発表などで東海道の通り沿いがにぎやかになります。平成14（2002）年からは、

8月に行われる「にっぽんど真ん中祭り」で鳴海ステージも開設され、区内からも多くのチームが参加し入賞しています。

## 2 猩々

昔から鳴海・大高・有松・桶狭間の祭りに登場する「猩々」。この地域に伝わる特有の大人形で、その風貌は、大きな体に着物姿、赤い顔に茶色い髪の毛。竹で編まれた体に張りぼての頭部を付け、大人が中に入って担ぐと背丈はゆうに2尺は超えます。

安永8（1779）年の『鳴海祭礼図』に祭りに参列する猩々が描かれており、江戸時代に猩々の存在していたことが確認できます。猩々の役割には2つがあり、1つは祭礼の警護と先導役で、もう1つは子供たちを追いかけて遊ばせるのが役目です。



熱田神宮本殿遷座祭に参集した猩々

大高の豪華な衣装の「ええ猩々」は、花車（山車）行列の先頭に立ちます。鳴海の「神様猩猩」は袴を着て神輿の先頭に立ちます。その他の猩々は子供らを追いかけて、作り物の手や棒でたたきます。猩々に叩かれた子供たちは「夏病しない邪気がとれる」などと言われ、伝えられています。有松には少し変わった「天狗」が

あります。猩々の由来には諸説ありますが、親が子供の無病息災を願って作りだした「愛情の化身」と考えると夢があります。

明治43（1910）年刊、伊勢門水（水野宇右衛門）著『名古屋祭』には「鳴海で有名なものは大猩々で背の高さは1丈23尺もあろうか、これに1斗樽位の朱塗り面に赤頭を長く垂れ、赤地平袖の着付に萌黄地の側繼と大口を着け、赤い大きな手をぶらりぶらりさせて闊歩しながらたまには其の手をもって往来人の天窓をお見舞申す」という奇體千萬な作り物、其仕掛けは中へ大男が這入って自由自在に運動すると云う無雑さな中にも何處やらの雅味があるのでおかしい、そこで此猩々の起因を聞くに往古鳴海潟の時代に此海岸へ一疋の猩々が泳ぎ着いたことがあって夫れより浅間社の祭礼にこの猩々の模型を作り始めたもので随分と古い古い祭りであるさうな、夫れで維新前五十三次の宿場として遊女屋の軒を並べ繁盛を極めた頃には遊女共が此の猩々に追われて逃げ惑う様も一興であったと同所での「古老」と書かれています。『小治田之真清水』の鳴海祭りの図には、行列の先頭に大猩々が出ているほか、七福神の作りものも描かれています。

猩々は平成21（2009）年の熱田神宮本殿遷座祭と平成25（2013）年の創祀千九百年記念奉祝奉納で子供たちと参加し、参道を練り歩きました。